

鹿兒島戰記 二編 上



10

15

20

25

A 421
3

篠田仙果録
永島孟齋畫

繪本 鹿兒島戰記

東京書肆

青成堂版

先般ふくの書初号を編み加賀屋の主人が
耳垂厚く諸君の愛顧を蒙りて大吉利市の
庫入ふ次編を早くと催されタツト乗り地の筆
拍子もストン泰然と治まり御代ふ浪立
西の海其顛末を聞かすに輯録を二冊の綴書と
し鹿兒島戦記の二編とあり

明治十稔
三月吉辰

笠亭主人篠田仙果



48-7863



暴徒等
三隊に分て
熊木縣下へ
乱入す

鹿角島



逆徒
三將の
壹個

桐野
利秋

同
篠原
國幹

繪本鹿兒島戦記二編之上

東京

再び説
暴徒
等ハ
まが



篠田
仙果記

手始め
戦い小縣廳と懼中さんたし敵對
せざるものいこれと殺さるまうれと
評議ぐに一変し軍備あふま

整ひなれ
いざと計り又操出ぬ



五
日
二

五
日
二

乱入せり縣廳より
直宿し人々
加ひて生徒が
暴ふる所業を
知る所の
撃せん
との思ひよりさる
更うれば大ひの驚き
身支度を今間
たあ八方より群
入るめを元より
多分の人員に居ら

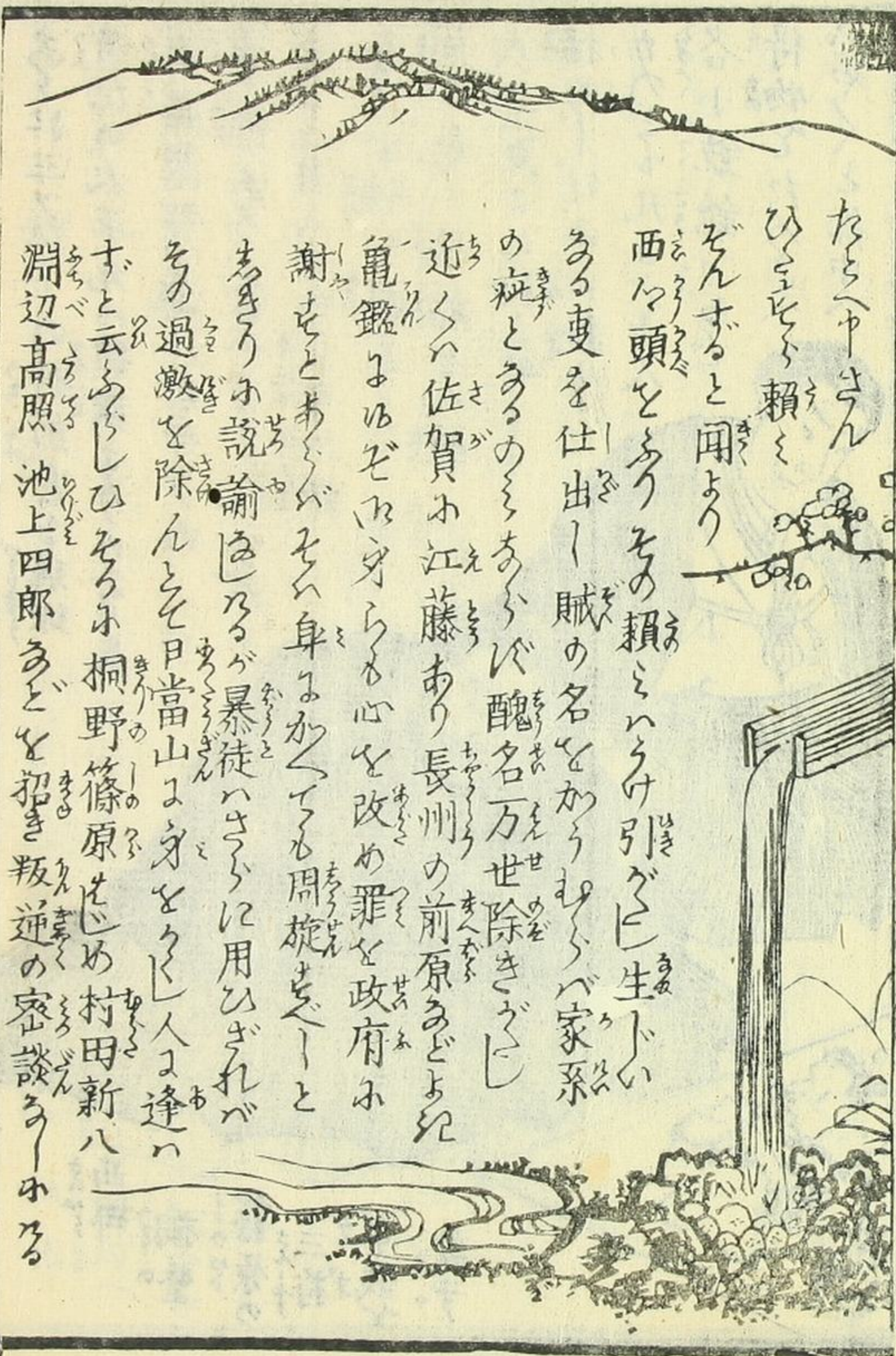


一日例の暴徒ら救
名西郷隆盛のや
しに小到り對面
めらんとてを致
そらん君もも
知ろし召つらん
此度とて急ぐ申
あつせ小銃あり
び小弾薬を數十
画うをひし
縣廳を襲撃し
海陸ともけんぢりに
固めをありしを

且縣廳へ手扱
宿直の人々の
身寸鉄も帯ざる
故に猛り有りぬれども
十分小防ぎがくいと残念
の思ひども終に縣廳を兼取られ
他國より當縣廳へ出役せし
人々の暴徒がため幽閉られり
○一説にこのとき縣廳の人々等
宜防ぎ戦ひて暴徒らを追ひけり
暴徒らあぐらを火を放ちて焼く
此説の虚実知らねと長崎新聞
縣廳焼失のよ一記載せり
備考あり

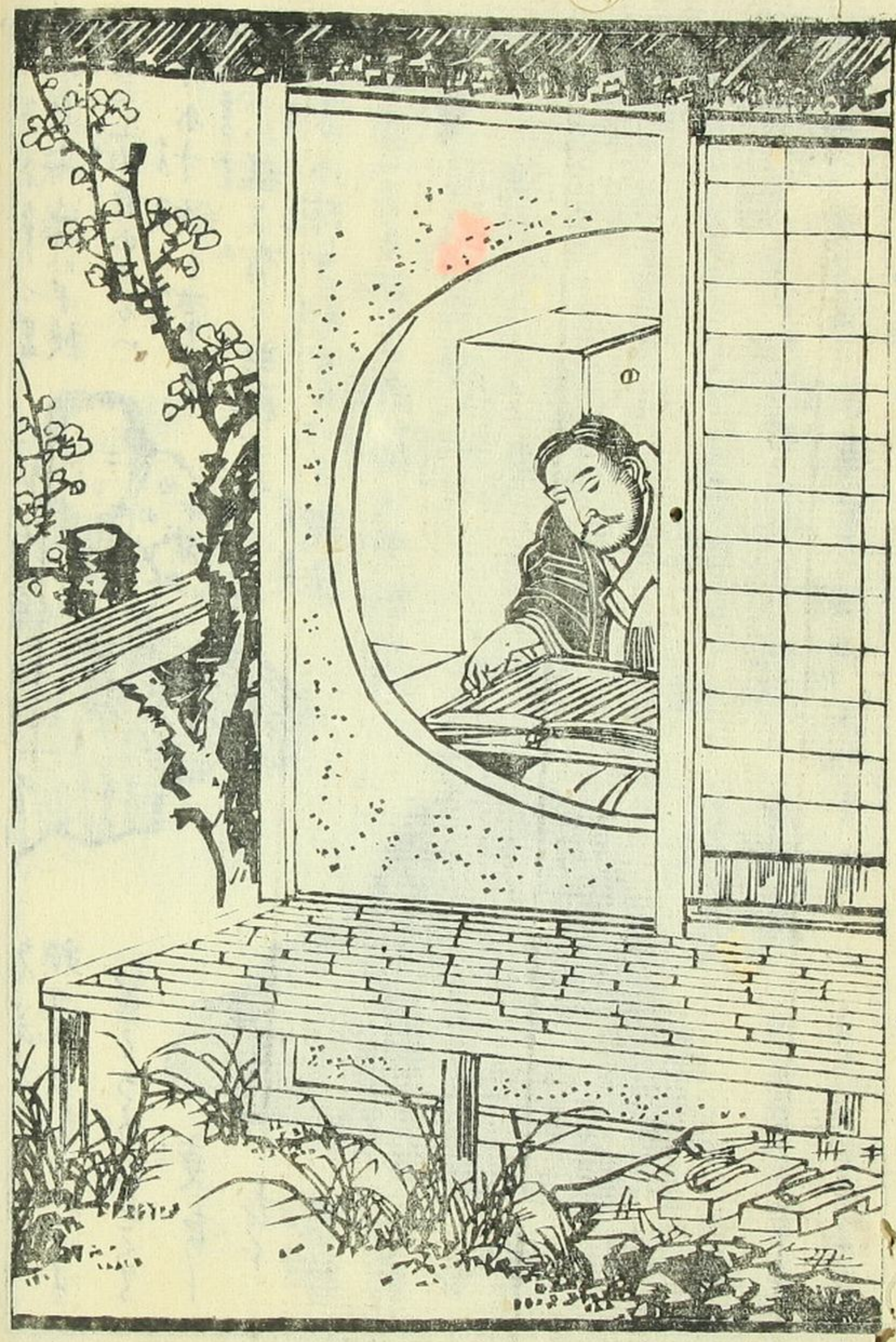


鎮臺兵むくふとも
元師君
隊將
憂へ
元師
小たり下さる
よとびるよう



徳島二

たとへやさん
 ひまじり頼
 ぞんぶると聞より
 西々頭をよりその頼といひ引ぐに生トい
 るる変を仕出し賊の名をかうむらば家系
 の疵とあるのみあかば醜名万世除きざし
 近々佐賀小江藤あり長州の前原あどよ江
 籠鑑よぶぞお身らも心を改め罪を政府小
 謝とあかばその身よかくても周旋とていと
 志より小説論はなるが暴徒はさうに用ひざれば
 その過激を除んとを日當山よ身をくく人よ逢ハ
 すと云ふはしひそろ小桐野篠原はじめ村田新八
 淵辺高照池上四郎あどを招き叛逆の密談あり小なる



徳島二

五

あつに三ツびの持船なる琉球
 通ひの太平丸の彼國よりめどりの
 海路鹿兒島小右やうの
 事件ありと云いきく知らぬ
 去る二月八日の正午八港
 なりて錨を投ぎし
 間もなく早船七八艘
 太平丸よと云ひしやうが
 猛りけし出扮
 ののど心凡五六十人
 各小銃鎗刀など
 得物やたぐき
 必やくと船中へ



西郷
 桐塾の
 篠原の
 三將
 軍議を
 談ず

か入せしや衆組の
 人々のあひひもけぬ事
 なる出何更やらんと周章
 まどひて逃かるといふ
 その時暴徒の船長なる廣瀬
 某と叫出し子細ありて
 此船の番兵を付る間
 一切出帆ありし強て
 投錨せんとあつた兵力を以て
 壓さるゝそれくと指揮の下より
 鬼と見まふ壯年と十余人舟よ
 のじその余いさなく漕戻りぬ扱つる
 変るや舟長の廣瀬某の折々上陸

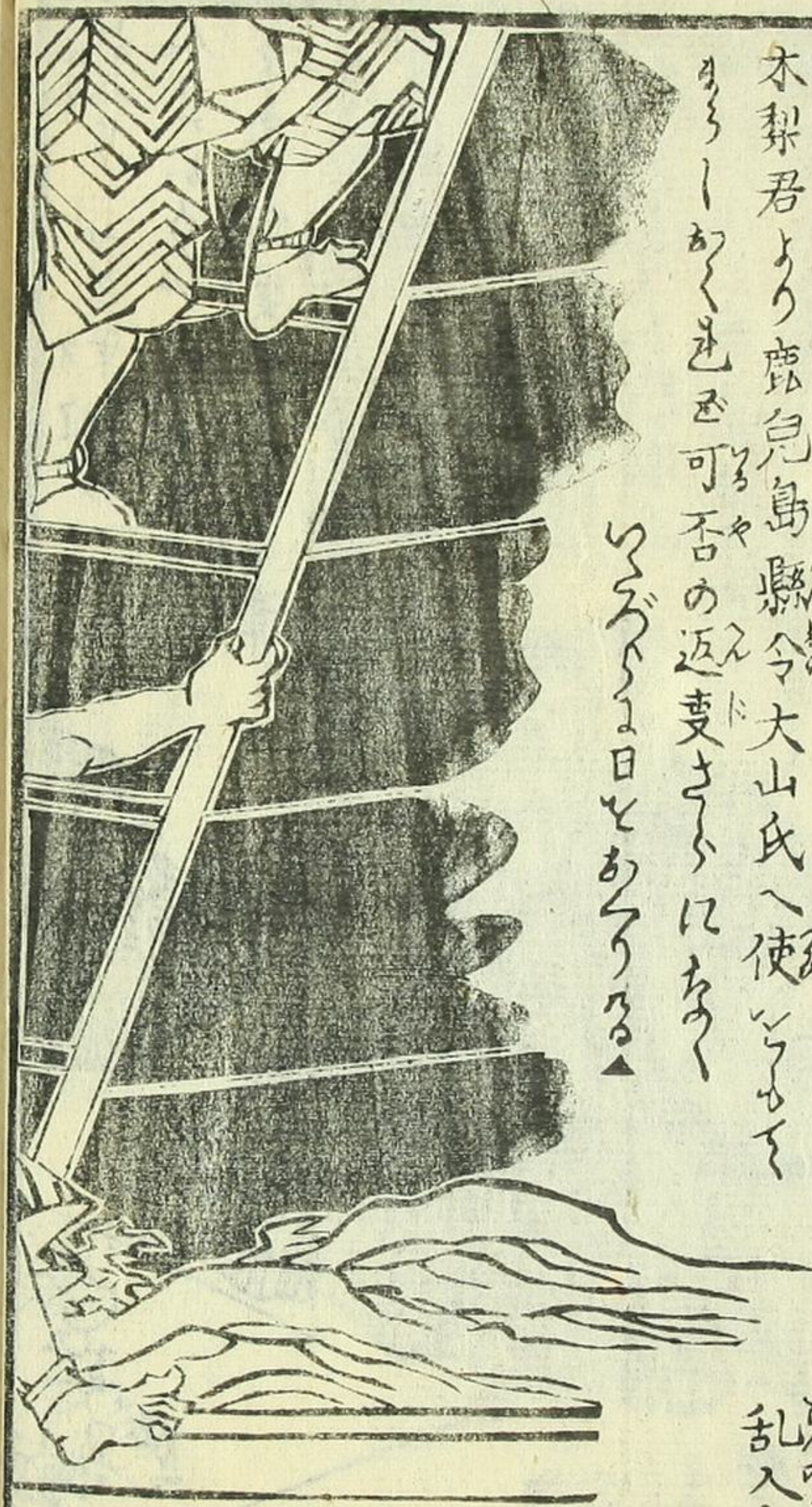


琉球へ
 船中
 時
 とき
 出

せしき内務少丞木梨精一郎君ものり廻り
居られれを何れも出帆せしめたるものあり
速く出帆の相ある中取り下されよと
木梨君より鹿島縣令大山氏へ使へり
ありしむ可否の返事さすにあり

いづる日とあり

○生徒等
太平丸へ
乱入を



▲叔同月

十六日大山

氏より此度の

事件を認め

朝廷への届文を

木梨君に托せし

が俄小城下さす

人東西よりけし

兵これとて皆上陸は

られその暇も辛う

五目一



太平丸錨とあが
 鹿兒島港と
 出帆あり神戸へ
 へ港あり
 ○大山縣令が届け
 書の文意をへんこ
 大山氏も西々らふ
 加膽せしむる
 めのとるゆれど
 文ありり色ばこそよ思各い
 ○日當山ふ身とむそめい
 西々隆盛ゆうすさうのい
 鹿兒島戦記二編上



▲ちよまた時機とありいふれい
 隊長分の人くと招きさうち
 向ひてちりい玉薬山

△十分あり
 兵は多く集り
 ち拙者が恩
 意と述べると
 坐席の真中
 進

明治十年二月廿六日御届

定價六錢五厘

下谷上野町一丁目十二番地

編集人 竹條田久次郎

米沢町一丁目七番地

出版人 堤 吉兵衛

010190509821

